３．１ 『川の駅』体験フィールド分科会

3．メーンイベント（1日目）

3.1.1　A 分科会『治左川とトミヨを守る会』

■　日時：8月21日（土）10：00～14：30

■　受付：上真柄ふれあい会館

［概要］

会場の武生市上真柄町ふれあい会館には会員の住民21名が参加者を歓迎した。代表の石本義勝氏のスケジュール確認が行われたあと、会場の味真野地区に保存されている越前漫才が披露された。起源は継体天皇（450～531年）時代とか、源頼朝に披露したという伝承もある古いもので、新年の祝福芸として、また、冬の間雪に閉ざされた北国の人々に春の訪れを知らせ、また、越前万歳は春先の娯楽として庶民の間でもてはやされた。

■　全国から参加者がゾクゾクと集う

次に、高津琴博氏（NPO法人田んぼの学校越前大野）から、絶滅危惧種であるバイカモ、そして、そのバイカモに育まれ湧水にしか生息しないトミヨの紹介が行われた。そして、午前中最後のプログラムとして森誠一氏（岐阜経済大学経済学部助教授）による基調講演が行われた。話の核心に至っては、①日本は豊富な水環境に支えられた「川の国」であるということ、②トゲウオの保全活動を行うにはその種の生態や育まれている環境を熟知、すなわち、「相手のことを知る」必要があるということ、③トミヨを学ぶことによって、個々が生まれ育った故郷に対する思い入れ「郷土力（心）」を養うこと、④郷土力（心）を今後広めるにあたって、リバーネットなどがその役割を担うべきであること、以上の4点であった。

午後から始まった、バイカモ刈の体験においては、参加者は絶滅危惧種のバイカモを根こそぎもぎ取ることに抵抗を感じ、なかなか思い切ったバイカモ刈が進まない様子であった。バイカモを拠り所としているヨコエビも多数見られ、また、参加者の何人かはトミヨを手にとり歓喜の声をあげていた。本来ならば、7月の第4日曜日に定例のバイカモ狩りを行うはずであったが、今回の分科会のために刈らずに残してあったとのこと。

■　バイカモ狩りの様子

バイカモ刈の体験活動が終了した後は、石本義勝氏、梅田久之氏、高坂直氏の解説のもと、湧き水の流れの来る源流、水の枯れた文室川、そして、本山毫摂寺などを訪れた。

別名で水無川と呼ばれる文室川の水の枯渇の理由に関しては、様々な人的要因が挙げられ

た。工業用水の汲み上げ、杉の植林を増進させた結果、山の保水力を低下させたことなど現状は様々であった。この文室川の水が湧き水の源となるのだか、文室川の水が全て地下に浸透してしまったことで、湧き水の量も激減したという。ここに、私たち人間と、その人間の生活の拡大によって、大きくその在り様を変えられてしまった自然との関係が、参加者にとって非常に複雑な心境であった。

プログラム終了後に、行われた意見交換では、人間と自然との間に繰り広げられる保全活動に関して、外部の人を巻き込んだ活動が展開されないか、ということが議論になった。しかし、地元の人たちは、あくまでも、このトミヨやバイカモの保全と彼らを巡る湧水の問題に関して、地域の問題として捉え、地域の人々で向かい合って行きたいということが主張された。

［森　誠一氏の講演議事録］

森　誠一（岐阜経済大学経済学部教授）

1．トミヨの生態と人の関わり

トゲウオ科のハリオは岐阜県と滋賀県の一部　にしかいない。イトヨに関しては、福井県にその淡水型がいる。イトヨに関しては太平洋戦争の前に国の天然記念物に指定された。本州にいるイトヨ、ハリヨ、トミヨは湧き水にしか生息　していない。なぜなら、もともとこれらトゲウオ科の魚は北の方に生息している魚であるから　である。したがって、本州にいるこれらの魚は　澄んだ湧き水が彼らの住処となるのである。

トゲウオは人が日本列島に現れる前からこの地　にいる。彼らが生活するには絶対的に湧き水が必要なわけだが、そこには絶対的に人の生活がかかわるものである。

2．「川の国」日本

私は日本が「川の国」であると考えている。

小・中学校などでは日本は「山の国」であると皆さんは習ったはずであるが、日本の山は台地状のところでは、山や谷もあり、谷があれば川もたくさんある。国土交通省によれば、川に名のあるものが2万数千数もある。この2万という数は日本国土を考えると非常に多いものである。生活の中で川に名前をつけ、そういう意味でも我々の生活に川と関係が強く、生活基盤に川との接点が非常に強い。さて、日本では、山から土砂を運び扇状地を作っている。それが平野を作り、我々の日々営んでいる生活の基盤を作る。したがって、我々が住む平野は川が作ったものであるといえる。言い換えれば、川が我々の生活する場所を提供してくれているのでる。また、農業用水や工業用水にしても川の恩恵であるといえる。大きな話をすれば、四大河文明にも代表されるように、我々の文明が生まれるのも川の恩恵によるものなのである。

以上を考えても、日本は「川の国」であるといえる。その所以は、川の数だけではなく、我々の生活と川との接点の関係なのである。戦後、高度経済成長が成し得たのは、川の水資源があったからである。例えば、当時タンカーで、農業用水、工業用水の輸入はできなかったわけである。水を自給自足することによる

我が国の水の存在こそが高度経済成長を成しえたといえる。ただ、単に水の量が豊かであったというわけではない。水環境、生態系、すなわちトゲウオ科の魚をはじめ、それらの生態系は非常に豊かであった。環境というものが大きな国家ステータスを占めるようになったのである。そういう観点から、「川の国」日本は水の国、または、真水の国ともいえるだろう。

皆さんの中にもトゲウオを初めて聞いた方もいるでしょう。もちろん、日本では、この魚はあまり有名ではない。それは、湧き水のあるところにのみ生息するのである。全国的にあまりいるわけではないので都会には馴染みがないのである。

しかし、学術的には非常に優れた魚である。それは湧き水と結びついた地域性が高いということと、希少性が高い、すなわち、絶滅危惧種に指定されている地域が多いということである。これらのことに則り、地元が密着して保全活動を行っている。翌月25日にトゲウオ全国サミットが大野市で行われるので、皆様には是非来ていただきたい。

3．相手を知る

次に、保全の話に移るが、守るという行為はトゲウオという魚に焦点を当てるのではなく、トゲウオのいる環境を守らなければならないのである。一つは、湧き水において、どういう生態かを知らなければならない。巣を作る魚は世界で3万種いるが、自分の腎臓から独自の粘液を作って巣を作る魚はこの種だけである。その生態を知ると、今度は水草の必要性が浮上する。ハリヨやイトヨは川底に巣を作るので、川底が砂地である必要がある。したがって、一種の生物を守るという行為には相手を知る必要があり、彼らの生活をまず知る必要がある。お歳暮というものが日本文化にはあるが、他人は欲しくないものをもらっても嬉しいとは感じない。相手が喜ぶようなプレゼントを与えるという意味でも、相手を知るということは非常に重要なことであるといえる。これまで、私自身、様々な試行錯誤をしてきた。私の出身地である三重県には、ハリヨがいた。しかし、現在では絶滅して存在しない。このことからモチベーションが上がり、今は岐阜県で保全活動をしている。地域で活動する中でその想いが正に強くなった。

4．郷土力

水棲生物の観察などで、小・中学校に行くが、これは学校では伝統になっている。私は、子どもたちに理科教育の一環として、トミヨの話をしているのだが、ある岐阜県の小学校から講師のお礼にと感想文が届いた。その感想文の中で60名中、12名から、私はこの川のゴミを拾いたくなったという声が見受けられた。その感想文を手にしたとき、私は、子どもたちにとっての故郷の思い入れというものを感じた。トミヨを勉強することによって、他ではないこの地をきれいにしたいという感情が芽生えたのだろう。

■ 熱心に耳をかたむける参加者

このようなことを通じて、故郷の思い入れを養うことを大切にしたいと思う。その思い入れの強さを郷土力という。私はこの郷土力を最

近の流行言葉にしたいと思っているのだが、正に郷土力を今後広めていく必要がある。

5．最後に

今、このトゲウオが絶滅の危機に瀕している。それは私たちの集落が生まれた生活の基盤を失うということを意味する。こうした保全は、トゲウオだけを守るのではなく、地域の水資源を守るということである。今後そのようなことを進められるに当たって、地域とのタイアップを期待していきたい。

3.1.2　Ｂ分科会『田倉川と暮らしの会』

■　日時：8月21日（土）　13:00～15:30

■　受付：リトリートたくら

［概要］

午前中に行われたD分科会の参加者が昼食後、今庄地区に移動し、リトリートたくらに到着した。田中保士氏（日野川流域交流会）および、アカタン案内者である地元の語り部のお二方の説明を受けた。説明内容は以下の通りである。

■　自然の中で説明を聞く参加者

○　日野川流域交流会：田中保士

日野川・田倉地区全域をフィールドミュージアムにしたい。これまで、自分たちにできることを模索し続け、地元の人たちや有識者　とプログラム作りをしてきた。

■　地域住民と都市住民が交流する

○　地元の語り部（アカタン案内者）

・　このアカタン地区に昔の堰堤が残っている、明治28年に大水がでて福井で初めての砂防ダム第一号工事をした。昔は女と子どもが作っていた。

・　堰堤を全部発見するまでは約5年かかった。100年間歴史が止まったように隠れていたのはこの間大きな災害はなかったのかもしれない。

・　今は昔の人が堰堤を修復している。

・　堰堤はあればこそ今のこの村が存在していると思っている。

・　他の地区と同様に過疎化が深刻になる。

■　見事な石積みの堰堤に登る

バスでアカタンの堰堤を見学するために山に入った。石の積み方が非常に工夫されており、遠くから見るとお城のように見えるほどであった。

■　様々な提案が出た

見学後歩いて下山し、途中の小屋でワークショップを行った。

3.1.3　C分科会『ひまわり探偵団＆スマイル探偵団』

■　日時：8月21日（土）9:00～15:30
（準備、片付け含む）

■　受付：レインボーパーク南条

■　全国からの参加者が押し寄せる

■　参加人員

親子スクール・母親クラブの親子42名、
その他県内親子18名、
高校生・教員20名、
講師・スタッフ・RAC46名

① カヌー体験
② 流される体験
③ ペットボトルのいかだに乗ろう体験
④ もんどり製作体験
⑤ 竹のいかだ作り体験
⑥ 魚と水棲昆虫捕り体験
⑦ 地元漁師さんによる魚のお話会
⑧ 手作りの無農薬野菜を使ったカレー汁の昼食
⑨ 大切なお水のお話会（親子対象）

小学校3年生以下の子どもたちは二人乗りカヤックの前に、4年生以上の子どもと大人は一人乗りのカヤックに乗った。最初はカヤックに乗り流れることだけを体験したが、2回目以降はパドルを使いながらの川下りをした。乗る機会が殆ど無いため、ずいぶん前から楽しみにしていた子どもたちだった。カヤック初体験の満足した顔がまぶしかった。

■　カヤックに挑戦！

いかだを用いた川流れ体験のまえに、まず、子どもたちが手をつないで輪を作り、その中にインストラクターが入って、水をかけ合ううちに、川に流れる初めての体験に表情もこわばっていたが、次第に楽しむようになった。

■　水をかけ合いながら水に親しむ

足を川下に向けて流れるレスキューの専門家の方からの簡単な説明のあと、自分たちで事前につくった竹のいかだに乗った。4人ずついかだに乗って50～60m程の川流れを体験した。

■ 流される体験コーナー

竹のいかだに乗ったあとは、ペットボトルのいかだの体験も行った。

■ イカダに乗ろうコーナー

身近な廃材を利用しての製作という事で、ペットボトルでもんどり（魚取りの仕掛け）を作った。製作した後、魚の習性からどちら向きにどんな場所に仕掛けたらよいかを学びながら実際に仕掛けた。ドンコが入っていた時は歓声が上がった。

■ イカダづくりコーナー

製作した竹のいかだも合わせて流し、一番生き生きした子供たちの顔が見られた。お母さん達もたまらず一緒にいかだ乗りを楽しんでいた。また、ロープの結び方などを体験しながら、竹でいかだを作り、完成後に実際に流してみた。

たも網で魚や水棲昆虫をとった。水棲昆虫は地元の工業高校生が主体となり、子供と関わりながら体験できた。エビや小さなヤゴ、ウグイやドンコを観察する事が出来た。

■ タモ網で魚をゲット！

大人も子供も一緒に、生き物の発見の喜びを感じる事が出来た。

最後に、スローロープの使い方の説明、および実演をした。その後、昼食で皆でおにぎりとカレー汁を食べた。川魚の学習として、地元の漁師から魚取りの実践、日野川に生息する魚の説明があった。魚は、ヤマメなど7、8種類であった。昔から使用された仕掛けの紹介、どうして魚は一度入ったら出られないかなど魚の習性などお聞きした。

子どもから、カヤックやいかだを初めて体験し、楽しかったことや、石がぬるぬるして歩きづらいことや魚の種類がわかってよかったことなどの感想を聞いた。また親からは、子どもと触れ合う機会ができてよかった。川の活動において子どもと接するのが難しかった。などの感想を聞いた。

■　地元の漁師さんから魚の説明を聞く

水のお話では、日本は水が豊かで水道をひねればきれいな水が当たり前に出てくる。地球上の水をペットボトル一本に例えるなら、淡水はわずか10%、飲める水は一滴にすぎない現実を、実験を交えながら話していただいた。貴重な淡水で遊べ、安心して飲める水があるこの環境を子供達はどう感じてくれたのだろうか。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

分科会発表（メーン会場に移動して）

企画の課題の抽出・提案

■　様々な立場の人から意見が出た

参加者にポストイット形式で記入頂いた感想を整理し、良い点、問題点、改善策を挙げた。

JT指導による親子でゴミ拾い。工業生によるテント撤収。会場の後片つけ。3時～3時半

C分科会発表（20分×2回）。

4時30分～5時10分

分科会の活動内容の説明と感想。課題の抽出と提案の発表。

全国の方々からの意見も聞きながら話し合いを行った。

企画にこめた思い

企画日数　約6ケ月間（2月上旬から）

私達は親という立場から子供達に自然の素晴らしさを見て感じて触れてほしいという思いから活動し今日に至りました。今は物質的に豊かでも子育ては難しい時代と言われています。だからこそ、自然のすばらしさ、水のありがたさ、生命の尊さを感じ考える機会が大事と考えます。この体験を通して親子で新しい発見が得られれば嬉しいです。

今後の活動においての課題

①漁業権の問題

今回のような川での水遊びや生き物に触れる活動においては、地元漁業組合への許可が必須で子供達が気軽に自由に遊びを楽しめる環境ではありません。子供達が水に親しむ大きな壁となるこの問題をいかにクリアしていくかが鍵となりそうです。

②スタッフの育成・確保

川での活動では危険が伴うため、安全面を確保する事が大前提となります。川での安全対策や知識をもった指導者の育成が重要といえます。

［反　省］

企画の面では、活動時間に制限があった事から一つのコースに30分～1時間と非常にせわしい活動となりました。一つのコースに最低一時間かけると、ただ作るだけでなく、そこから発展させていく事が可能となり十分満喫する域まで行けたと思います。次回からは欲張らずシンプルな企画で行きたいと思います。また、広い流域を管理するにあたり、各コーナーに責任者を置き無線を使うと良いなどの意見も頂き勉強になりまし

た。次回には企画を支えるスタッフも充実させ、大人も楽しむ余裕や元気が出せれば一歩前進かと思います。スタッフ集めや安全対策は大変でしたが、考え方を変えて、大人の監視の目が充実していれば、このような自然の中での子供達の生き生きした体験が可能なのだと思いました。さらに地元の「牧谷川の水を飲む会」の協力や、高校生が体験を通して親子と触れ合う機会が得られた事は、地域との一体化という観点からは大きな収穫といえました。今後も全国ですばらしい活動をされている団体のかたを目標に、地域の方と共に遊びの宝庫である「川」での自然のすばらしさを感じられる活動が出来ればと考えています。

3.1.4 D分科会『日野川流域交流会推進委員会』

■ 日　時:8月21日(土)10:00～13:00

■ 受　付:武生市役所前

■ 日野川中流域のすがた

［概要］

参加者は市役所前をバスで出発し、日野川に到着した。地元の武生土木の方から挨拶があり日野川を約700メートル上流に向かって歩いた。武生土木の方の話によると、河川流域の周辺に生息している生物を大切にしようと日野川流域交流会の方、周辺の住民、学識者の協力で土木課として、立てられた計画が成されているとのことであった。

日野川を登る途中の堰で実際に水辺に行き、サギのコロニーを見学し野鳥の専門家の中林氏による解説を受けた。

■ 専門家から説明を受ける

それによると、アオサギ、ヒヨドリ、ホオジロ、サギ類が繁殖しているコロニーがあり、沢山のサギが巣立っていっているとのことである。そして、日野川のサギのコロニーは周辺住民と非常に上手く共存をしているということであった。また、植物の専門家である斉藤氏によると、50年前の卒業論文で日野川を植生調査したが、そのころと随分変化しており河畔林が非常に少なくなったとのことであった。

再びバスに乗車し、次の会場まで移動した。そして、二班に分かれ、①日野川での体験(サクラマスの見学、投網漁法の見学)②堰の魚道の見学を行った。サクラマスは堰が作られているために魚道はあるが小さ過ぎて遡上できずに数が減っており、また、川の水の透明度は良いが水質は悪く大腸菌群が多いとのことである。

■ 魚道を自らの足で調べる

分科会の提案

- 1つの川だが区分ごとに違う遊びができそうである。
- 川辺は草だらけだが、一部分だけ刈ることにより活動場所として利用できる。
- 河道内樹林を残しておくことにより、もしサギコ

ロニーの林を切ってしまった場合、サギの行き場所が住宅街ではなく他の河道内樹林に移動する。そのため糞害も起こらず、人といい関係を保てるのではないか。

・川のそばに祠や神社があったりするため、風景と歴史と川の関係を多くの人が解かるようガイドを作ったりすればよい。

・いつから河道内樹林が柳ばかりになったのかを、航空写真を利用した年表をつくるとよい。

■ 積極的な意見が多く出された

子どもが遊んでいない、コロニーに21種の野鳥がいた。八幡魚道でハヤが遡上していた。葛を刈り取ると人が入れる。松森堰堤は研究個所だ。その上流は格好の瀞場だ。松ヶ鼻魚道はサギがいない長い魚道だ。サクラマスは中央でアユ、ハヤは側を上る。手作りカヌーで遊べる。風景を活用するといい。整備が進んでいるのでは。堤防から落差工がある。樹林を航空写真で把握しては。柳がない。コロニーを利用しては。テトラポットや石が放置されていて景観悪い。魚道はサクラマスとアユだけではだめだ。市民が近づいていない。活動の場所としては危険だ。川辺林にエノキ・タブがあるほこらがあり水害の逃げる、道がある、歴史的経過が豊富だ、看板で知らせたら、川のプログラムとして全体を活用しては。

３．２　交流会『川人の夜祭り』

川人たちよ、味わい、踊ろう！

おもてなし

・郷土の「田舎料理」
　山菜を使った料理
・あゆの塩焼き
・シシなべ
・シシ肉の焼肉
・地元の冷奴とあげ焼き
・越前そば
　（大根おろしで食す）
・ハスワイン
・地元の日本酒
・おいしいビール
・明るい笑顔
・陽気な住民

踊　り

ヤンシキおどり
でんすけおどり

プチイベント

１　心プロジェクト

あなたの手型を越前瓦を使ったタイルにしませんか？そのタイルを使って武生市の施設に張り付け手型広場を作ります。
●主催／社団法人武生青年会議所

２　アカタンに溶け込もう

ヒトがまだ眠りから覚めないころ、自然の中では様々な生きものが活動を始めています。皆さんの五感をフルに使ってアカタンの自然に溶け込み、自然を感じてみませんか。
●主催／ふくい緑ネイチャーゲームの会

３　アカタンの夜空と生き物にふれあおう！

ライトトラップに集まる虫と触れあうコーナー
●主催／ＮＰＯ法人田んぼの学校越前大野

見舞金の報告

大会当日には多くの皆様から見舞金を戴きまことにありがとうございました。

前日のRAC理事会での見舞金と合せて**金49，333円**を、福井新聞社を通じて福井県に納めました。また、見舞金のお礼（お土産）として被災した越前漆器を快く提供して戴きました市橋恒二様には厚くお礼 申し上げます。